四
歌代集
へ13
4037
4

釋迦御一代圖會卷之四

目録

舍利弗目蓮帰釋尊法門
聽世尊法助出罪囚獄中圖
安陸説舍利弗佛偈圖
世尊謁淨飯王若宮詣如來
世尊赴夕陽山圖
阿難迦難優婆離耶喻陀羅女得道
世尊於忉利天謁二世母君
提婆冠世尊并卒都婆功德

30 42 8657

門へ13
4037
4

世尊大神通懲魔軍圖

提婆勸謀叛斛飯王

世尊使難陀羅睺羅見三冥途

世尊示二太子三冥途圖　其三

世尊昇殿賜勅衣

離婆多依無失罪囚獄中

離婆多遣呵責圖

難陀王即位并淨飯王崩御

釋迦御一代圖會卷之四

浪華　好苔堂野亭考選

舍利弗目連飯世尊法門

摩偈國の三加葉世尊の徒弟となりて僧となりて偈國の王頻婆娑王の
もとに大ふ發心彼三加葉八皆法術あり就中大加葉八神通廣大なり朕が師ふ
るふ悉く釈伽の徒弟となる八淨飯皇子乃德三加葉乃上ふ出ーるあ然ば朕ふ
其統法をはぢめと商議ある茲ふ迦陵と云長者あり富一國ふ比者なし。天性大
善根乃人ふて財を散貧者を賑ふと雖ふ此頃世尊ア偈國ふ來り法を統ひ
ふいまだ精舍なれを尽く迦陵長者大檀那となり我が竹園ふ精舍を造營して
是を釈尊ふ献る如来感納ーもい彼五百乃徒弟ーてもふ精舍ふ移住ーもい是
を迦陵竹園精舍と号。國人乃爲ふ法を統ひ頻婆娑王乃夫人ふ諸大臣と
俱ふ迦陵竹園ふ詣其統法を聽聞ーもい歡喜踊躍ーもい數乃絶物を献せ
らるる王宮ふ還て牢獄を開き罪囚を宥ー大赦を行はれば人民いよいよ世尊の

法式仰ぎ尊み。時に釋尊の法弟安陸波門鉢を持て市中に入て食を乞ふに
一人の婆羅門に往遭ぬ。此人名を舍利弗と呼ぶ王舍城の産。門学の友目連と俱
に此頃ヶ偈國に来り住を両人とも聰明俊才にして。廣く書論に通じ。神通弁廣
大にして能ぶ者稀なり。然るに舍利弗今安陸の托鉢を見て。其動静の
尋常なるを感じ。進て向て曰。你が為脉新に出家せし者の如し。不知你が師は何
なる人か。名何と呼。何なる法を教織とする。安陸曰。我が師は釈迦國の皇
子なり。曾て菩提心を發し。檀特雪山に分登り。不惜身命の行をなすこと十二年
遂に無上真正の道を悟り。名を釈迦牟尼如来と謂。一切種智を得神通
窮なし。我は若年なれども学ぶこと日久しく。如来の妙法の義は一切統事不能
唯一偈を学び。你が為に云ふべしと。其偈に曰

一切諸法本　因縁生無主　若能解此者　則得真実道

舍利弗此偈を聞て神心朗かなるが如し。心に思ふ。我今日まで学ぶ所は真の道に
あらざる。釈迦佛の教えを生死を離る大道なり。我今より世尊の徒弟となん
と心已に決し。安陸に向て曰。初て如来の妙教を聞て胸中の雲霧を拂へり。
如来今何國に住し。安陸が曰。竹園精舍に在て法を説む。舍利弗悦
び曰。然ば我弟子を従へて精舍に参詣し如来の妙法を学んと。安陸と別れ
て住所へ帰りて目連を迎へ。舍利弗が面を見て怡悦の色頬に見れ
平素と異なれば向て曰。師兄面色歓喜を含み平日と相似ざる。必ず耳露の妙
法を学べり。我も御辺と同く道を学び信友の交を結ん。若我妙法を学
び御辺に告ん。御辺妙法を学ば我に告よと約定せり。若学所あらば我に説聞せ
んと。舍利弗が曰。推察の如く我今日市中にて一人の沙門に遭。彼威儀庠序
常人と異なれば必ず名師の教を受るなるべし。其故を問に果して浄飯王の子
悉達太子今已に正覚を得て釈迦牟尼如来と名を称せる。汝弥即ち其
徒弟なりと答へ。世尊より授る所の一偈の妙文を我に示せり。是に依て神心清

安陛舍利弗目連ふ
俳優とも

釋尊の法とゆて
罪人を獄中より
助け出す図

なる事を覓へ徒弟と倶に迦陵竹園に到り。釈尊の説法を聴き法門に皈せんことを願へり。即辺に倶に竹園に結ぶべきを向目連大に悅び我悉達太子の天名成事一度拜謁せんと欲されども未だ望成遂ざ。已に学道成就して程遠く竹園精舎に法説の天縁の熟する所なり。我が御辺と倶に世尊の法弟となるべしと。舍利弗大に悅び。両人脊く其准備をなす。釈尊曰に天眼通を以て早く是を知り左右の羅漢に語て曰十日の後必ず二人の婆羅門徒弟を引従て予が此精舎に詣し。法門に皈せんと。一人を名を舍利弗と呼ぶ智恵第一の人なり。今一人を名を目連と呼ぶ神通第一の人なり。倶に予が道を推弘る上弟なりと仰られ。加葉に曰如来何を以て知るや。釈尊曰予真正の道を悟り六神通を得られ三世を観通し物として知ざる事なしと仰られ加葉に感歎して曰ま是を信ぜざる所へ安陸回り来り。弟子市中にて一人の婆羅門に遭て偈を授けと。其始末を語られば是必ず舍利弗なるべ。とく猶を

説法して衆生を教化し玉へ所に果して十日余成過て舍利弗目連二百人の徒弟を引連て竹園に来り恭敬礼拜し各名を通じて如来の説法を聴き隨喜の涙成流し。法弟さらんことを望に。諸羅漢始て如来の六通を得給を知り嘆歎して不止世尊に舍利弗目連に為に法輪を轉じ四諦を説玉へ舍利弗目連に為に徒弟に歓喜踊躍し薙髪して佛弟となり阿羅漢果を得たり。斯て世尊は竹園の説法畢舍衛国拘耶尼国婆羅婆国に周行て説法し玉ひ往て迦比羅衛国に入伽陀国の境なる波夏祇耶と云市に出ひ舍利弗を召て曰予生老病死を厭ふ故に又母を捨て発心修行せと欲今已に学道成就し又母の国に近く来る。埋見て有べ。伽毘羅城に到り予が不孝の罪を謝し龍顔を拜せん事を願られ。命じ玉へ舍利弗法命を領掌し神通を弄て一刹那の間に飛行して伽陀国の都に到り。大光明を放ちて入民大に驚き。斯と王城に参内飯王も其故を知玉はず。宮人を生て其何者なる哉と問給る。此時舍利弗王宮の門外に来り又手に宮人

問く曰大德ハ何人ゆく何の為ゆ竺竹へ来ぬや舍利弗が曰貧道ハ釈迦牟尼如来の徒弟
舍利弗なり如来ハ是淨飯大王の皇子悉達太子なり王宮を出く檀特雪山の法堂
ゆ難行苦行して真正の道を需ること十二年今已ゆ正覚を得て山より出一切衆生を化
度し此國近く来りぬ依て弟子ハ父く不孝の罪を謝せんと願ハ此旨大王ゆ傳
奏しぬとゆ官人悉達の二字ハ聞て且驚き且悦び舍利弗を引く朝庭ゆ到り右の
旨を傳奏官ゆ就く奏しぬ淨飯王ハ三千年の桃の花咲海中の優曇華の開て
心地しぬ朕太子ゆ別て已ゆ現世ゆ相見て能ざること十余年が間是をのみ歎き腸
を断ちぬ豈ゆ再び太子ハ是ハ夢か現か歓喜踊躍ゆ勝ぬと
舍利弗ハ殿上ゆ結て礼拝しぬ尊者の厚情ゆ依て太子の消息ハ今恰ゆ勝ぬと
即刻迎結の車駕を進ぬ不知如来今何里ゆ在や舍利弗が曰波優紙耶ゆ在て
專ら貧道が面報を待ぬ淨飯王曰然て尊者と倶ゆ結招の官人を進ぬと夕陽
山青瓏殿ハ如来の実母摩耶夫人の霊を鎮祭る所なれば先彼所へ法駕を結ぐ

面縛ぬ奴婢と烏陀夷ゆ五百人の官人を副車駕を齊く舍利弗と倶ゆ波優紙耶の
市へ赴ぬ其后月景城へ御使を送る太子学道成就く波優紙耶ゆ来臨
わり使僧を以て對面を乞ゆ結招の為車駕を進せり先ゆ太子ハ仕て輩
晝夕陽山の青瓏殿ゆ到り如来の法駕を迎ぬと命ぜる憍曇彌夫人是を
失ひ唯是盲亀の浮木ゆ遭ぬ如く喜りの吏ゆ嬉ぬ涙ゆ頓ゆ新宮廬野
瞿陀弥ハ太子宮中ゆ在せ時勤仕せ女官へ勅命ゆ傳へ各々ゆ太子ゆ見る
事なれば身を清めて参ぬと面々ゆ麗紀新衣一重ぎゆ贈らる是ゆ依て女
官ゆ悦び勇まぬと云者なり其中ゆ独痛ハ耶輸陀羅女の御上なり前ゆ統
し如く太子出塵の後三年過て若宮を産ぬより種々の妄統なり憍曇彌
夫人ゆ疑れぬ世ゆ憂ゆ歎紀若君と倶ゆ垂竜の月日ゆ送ぬ
れぬ日影の花ゆ異なれど雖有く事物来る人ゆ有て今般如来の夕陽
山へ入せぬと告る者なれば此宮ゆ仕る妹女一人あり

参り。太子御望を遂むひ尊ひ如来と仰ぎ奉ひく。近く夕陽山へ来らせ給ふ。后宮より宮中の女房達へ新なる衣を賜り。各青瓏殿へ如来の御迎へ奉る。侍るに此宮へ入りて其賦衣の さもしらぬやと恨み告れば。耶輸陀羅女も一度は悦び一度は怨むひ。御使へ此宮も疾告せ給ふ其麦なれば若宮産れ給ひより。絶言なる人の麦く上も猶疑ひ給ふ。世に持ち給ふ恐も思召。御衣の袖を絞る許に泣むひる。年頃待こがれし如来に此時見へ奉て若宮の御使へ上ぜば。何時の身の濡衣を干られなく。推く后宮の御許へ使を奉る。風に吹もしつべし。太子学道成就ーむひ青瓏殿へ光臨させ給ふ。盛野瞿陀彌の二方ぐ太子に仕へし人々御迎に参り給ひて可憐願くは妾も御免を蒙りて よそながらも如来を拝まれーんと申せられれば。憍曇弥夫人も。さぞ衣に思召れ心任せにーむと四答申ーむ。賦衣の沙汰は有られを最面伏なる如来に見なる然憑に若君を伴ひ今は引後く夕陽山へ赴れむひる

浄飯王對顔釈尊若宮知如来

佛弟舎利弗は勅使烏陀夷と倶に波優祇耶へ回りく王命を報じれば如来歓喜ーむひ。烏陀夷を近く召ま。別来の素情をのる。長途の疲労を称ぎ給ひ

ひるるぞ。烏陀夷も恭敬礼拝ー。世尊の法顔を見奉るぞ。ーも美玉の如くなー貴層も。十二年の難行に痩黒ーむひ。昔の面影は在ざれども。端厳の法相尋常なるぞ。一千五百の阿羅漢の中に在を体。萬星の中に名月の出る如くに自然頭の低る心地。隨喜の涙に袷を沾ーぬる。学道成就を祝ーなり。車然車半ー乗ーむ人夷を乞。世尊是を待て仰ぐ。予が身往日と等ーなれど豈車駕に乗ざれば難ー止く退けーなむひ。偖目連加葉仏を顧く曰。予今般故国に到る。息愛の絆に曳るむわるぞ。下化衆生隨縁真如の為なれば女時師弟の礼を除。同伴と成く赴くぞーなく。神通を以く紫磨金光を縛ぐく緒羅漢とひーく難行の姿と現ぐ。車に乗ぐ。草鞋を踏ぐ歩ませ給ふ。烏陀

夷之已事を得ざる官人を従へ先に拂上其次に三加葉先達一二五百の僧侶
左の路を往き金利弗目連富樓那先達一二五百の僧侶右の路を往き世尊八五
百の僧侶を従へ中路を往き広伽陀國の人民隣々此吏を安傳へ如来の光
臨に拜まんと蟻の群の如く地聚り波優祇耶より多陽山まで数百里の間路
上の両辺に坐に連雖を敷き地に敷き今やと待所に前隨の官人鉦鼓
管絃を奏して通行す其次に八千五百の阿羅漢三行に列を立て通る然ど
も是を世尊と見まるるだに有れど其より是より圓で有り衆人大に望
に失ひなど唯何となく尊く覚へ皆偈仰の首に低に多し斯て日に重て世尊
八夕陽山青瑤殿に着き玉ふ殿上殿下の荘厳善尽し美尽し伽羅栴檀の香
馥郁として名香世界に異なりと殿上の左に浄飯王の玉坐に設け其次に橋
曇弥夫人の坐其より新宮廣野瞿陀弥を始め紆夏の女官居なれ耶輸陀羅女
も若宮に綺て其中に居むり其他三大臣月卿雲客百司百官今日を曠と衣
冠を飾り巍々堂々と粲烈を右に釈尊の法座及び衆羅漢の席に設られる時
に世尊目連金利弗三加葉以下の雑り昇殿して法坐に着き玉ふ浄飯王を天
人新宮月卿雲客まで如来を拜まんと目に見むまでも皆一様の藤の太布を墨に
染る衣に着し木葉を糸にて編る袈裟を身に日に黒き痩疲れる汝門のこれで
何に成れるか分ず衆人惘昇る計に成る者か茲に耶輸陀羅
女に若君と俱に女官の中に居むり身の治衣を脱人に此時なり潛に若君の耳根に
只に成よ世此年月両に花け風に花け悪暴に成り又君に彼羅漢達の中に在り御身是
ど又君と思ふ方に是進せ奉る遺物の御片袖を手に渡し此時若宮に十
に成り成るぬ母君の仰を得ず件の片袖を把る人を撞に成り出に王
の近臣是に引留是に玉坐の前なる何者の兒なれど出るぞ疾退
なる若君女に成るぬ何者の兒なれど丸如来に物献るなり你ど知ぬ義に成るぬ
振り成り徐々と歩り成り第三の座なる羅漢の前に跪て慎で片袖を捧る

其時彼羅漢手を伸して片袖を採完示と笑ふ。不愛真如妙覚無乃衆生智願皆
円満と唱むで忽ち阿羅漢の形を顕じて三十二相八十種好光明無量大覚知現の
法相を現じむひ御身より大光明を放白毫より金光耀く殿中の七宝錦繍を映じ
いで色彩を増ふる浄飯王憍曇彌夫人其余今まぐ疑ひ惑ふ人々堂上堂下一斉
ふ此奇特を見て感嘆し思ひを首を低て礼拝し礼拝し千五百の阿羅漢も
座具をのべて恭敬礼拝し本吉本仏南无釈迦牟尼如来と唱ふる是なるか耶
輸陀羅女の嬉しさに〳〵我をぞ列と出ぬ〳〵仏足を拝む。世尊の御又浄飯
王御母憍曇弥夫人を敬礼むひ。不孝の児大息無比の又母の慈心を悖り宮中を潛
出出家学道せ重罪謝せるふ引なく中せぶも一切衆生の煩悩を救ひ極楽浄土
へ引接せん為なれど恕しませ。偖も此稚れ者。耶輸陀羅女ぞ宮中を出て後三
年成程て所生なる緒人ぞ其期ふ後て姓娠せ成て疑惑を生じ是非の議論
有ぞれども耶輸陀羅女貞操無双なる敢て行ふ穢を者ふあるぞ。ぞ別離の期

ふ臨と彼ら胎内ふ指ざて三年の後男子を生ぶと言ふ是世の不知所なれど疑念を生
ぶるも理なり。然ども因位の子なる成仏の子錦の片袖ふ対偶を唱むひ不
思議なるふ忽ち廿五言の妙文織なせるら如く現ら。浄飯王手ふ採て見むを

我去後三年過可得善男子即是我因位為正汝生来大善知識

とあり浄飯王大ふ讃歎むひ后宮憍曇彌ふ見せむを疑念初て霜の如く解て後悔
慚媿ふ勝むぶを三加葉舎利弗目連以下ふ尊ぶ若宮の因位なるとて世尊と崇く敬
礼し礼て堂上堂下無数の人如来の神通力若宮の聰明耶輸陀羅女の貞操を賞
感涙を流さぬ人なかりき。斯く世尊ハ緒羅漢と倶ふ御母ノ耶夫人の霊位を祭むひ
陀羅尼を編し般若を行じく吊ひ又生身の如来高徳の阿羅漢の供養しむること
かれど霊魂ふ嬉く思召天上の楽竟生しむらを最ふあるぞ覚へる。其後浄飯
王別殿ふ如来師弟を請ぜん斎戒供く供養し別後の御物語りして歓喜
ふ勝むぶを若君ハ其日より佛弟とし成むひ法名を羅睺羅と号。舎利弗を文書筆道

釋尊夕陽山ホ
走九りんと四天王をもよめ
諸天神等護の図

乃師おそ附むひるる

阿難伽難優婆離耶輸陀羅女得道

其後旬日を経て浄飯王青瑞殿乃後堂を浄め法座を儲て世尊師弟を請ず。妙経
を統ぶせむと望む世尊勅命を畏て仰ぐ八年来苦行ゐ身命を抛ひ一切人天
を化度せん為ゐ此を統法ハ望む所なれども父王法座乃下ゐ居ひて八統ぐ唯高
座ゐ簾を垂て聴ゐ聴ゐ聴ゐと仰ある浄飯王ゐむひ是ハ思もよらぬ仰ある
三千世界人天乃中ゐ如来乃上座ゐ登る者やいづれ朕が事を念て此を法
座ゐ上りて統法せむと倫言あれども世尊尚推返せむひ統法とゆも別乃義ゐ
ひて衆生乃邪を滅ゐ悪を退け自然の善道ゐ至ちむる揩様ゐ此れ人ゐ
七恩あり是を知て父て人倫を不知ハ鬼畜木石ゐも劣りて先弟一ゐハ天地の恩人乃
胎内ゐ宿るより生育ちて天地乃恵ゐ非て此恩を不知者、死て無明の
闇ゐ迷ひ昼夜を弁ずと能ぐを第二ゐ国王乃恩人生て天地乃恵を得るとも

国王聖明なりぐれども父母ゐ難て能ぐを其恩を知ざれば地獄ゐ墮落して益
大乃為ゐ身を焼て乃苦患あり第三ゐハ父母乃恩母胎十月乃深恩を以て出生後
又ハ終日夕ゐ出て世業の為ゐ身を労し母終夜養育の為ゐ眠ぐ此恩を不知ば
畜生道ゐ生を得或ハ五躰不具乃者となる第四ゐ師乃恩人生長をとる教導
て人ぐなれば鬼畜ゐ異なぐ此恩を不知ば後身愚痴無智乃者と生て終ゐ悪
趣ゐ墮落を第五ゐ明友乃恩假令師ありて教導すとも良友乃補なくば裴逢
を得ぐ此恩を不知者ハ慳貪無慚乃者と生て天罰を蒙る第六ゐ
従類眷族乃恩良友ありて過を正し非を練善道ゐ導すとも眷族乃助なく
て八銭財竭て長久を不得此恩を不知ば後身人非人となりて終ゐ餓鬼道ゐ墮
落を第七ゐ衆生乃恩身ゐ良友眷族乃助力ありとも衆生其能を愛して才を貴
ぜむ事能ぐ世ゐ交る事能ぐ此恩を不知ば後身孤独乃者となり刀剣乃地獄へ落
慎で慎むべ八此七恩なり就中予第二第三乃高恩を蒙りたること須弥山

猶低く滄冥海に尚浅し。ゆゑに又王を下に置たり。予が身高坐の上に在て銳法
を説き緒天の悪を結十二年の難行も水上の泡と消ぬべしと仰れば浄飯王
龍顔に感涙を浮めむ。実有がる御使の多く。是に増たる銳法なし。理と
尽し。仏意に悖ん。悼あり。然で朕が黨内に入べし。如来高座に上り御法
を銳むべしと已使を得ぎ玉座に入せむ。是に依て世尊法座に上せ
四諦十二行法論を轉じ般若の功徳を銳むべ浄飯王八くだ使り。后宮新宮
及び月卿雲客隨喜の涙をとどめ。其中に耳露飯王の御子廣耶太子
今て世尊の銳法を聴聞あり。感伏あり。実や世路の悪道八日に近く。菩提善道
八夜に遠し。厭ひてもいとふべし。生老病死苦なり。慕てもまよふべし。耳露の法味なり
唯願く如来我が法弟となし。菩提心修行なしと願ふべし。世尊善来比丘
と曰ひ即時に剃髪せ法衣を著せ是が阿難尊者と十麥聞通を得て十
大弟子の二人なり。是が白露飯王の御子摩陀太子 阿難尊者 優婆離尊者 烏陀夷尊者

仏弟となる是亦十大弟子の中なり。其他に時に比丘となる者百五十余人ぞ及ぶ。茲
に耶輸陀羅女八人なり。孝く出家得道あるべし。心中に思ひ入る八世尊再び宮中に回り
給ひ給ふ。大王なる人々の疑ひ解胸裡の闇晴れぬれば現世の思出是に過ぎ若
君さへ得道し給ひぬ。女なれども戒律を授り菩提の道に入ぬ。舎利弗に就て出家
の望あるよし願ひ奉る。世尊敢て許し給ぬ。耶輸陀羅女大に歎き入れ再三再四
願て止むなく目連其志を憐み如来に免許あらん事を乞と。世尊尚も肯ぜず
く曰く。女人を予が法門に入れば仏法清浄の道悠久なる事能く稲に
莠の雑生なく遂に稲の秀なるが如し。女人菩提の念を止むべしと周く許ざれば
目連も理に伏く耶輸陀羅女に其旨を告。唯菩提の念を止むべしと練む。妃大に
望を失ひ深く歎き沈むべきなり。一時阿難法用に就殿門を出る時。妃八袈裟を著し徒
跣にて路上に跪き號泣して地に倒る。阿難驚き其故を問。妃答て曰吾倩菩提の
道に入んを願と金如来敢て許し給ぬ。此故に悲に不堪なる姿となりてかとひも敢

を亦両度と泣き乎阿難其志の切なる哉感じ扶起し慰て曰深く歎れ勿く吏なれ我如
来ハ縁し悃ハ願ひ御望を達せしめ進をゞ〜そ練め縁し宮中へ回り偖世尊ハ揚し
向く曰曾て如来ハ承る過去の緒佛皆比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四部の衆を具し
むつと繞むつる此吏実ハいや香や世尊曰素り過去の緒佛ハ四部の衆あり阿難ゞ曰然
ゞ何故耶瑜陀羅女ハ出家得道成行むゞるや世尊曰く女人ハ物ハ感じ安く亦愛し
安し此故ハ恚忿ハ行ゞ彼女〜ハ敬を守り大精進をなし〜愛せゞ得道を行と
ゞ〜阿難悅び退く耶瑜陀羅女を招く世尊の仰を告られゞ妃ハ歓喜ハ不勝天地ハ
誓ひ敬を守り大精進とゞ〜とやさくハよりゞ阿難其旨ゞ世尊ハ佛勅を受く戒師
となり遂ハ妃の飾を落し比丘尼となゞ耶瑜陀羅女此時三十七歳盛ハ安く過ぬれゞも尚
散残る花の面貌端厳なるハ丈ハ余る緑の黒髪を薙き〜ひ羅綾の袂を墨染の袖
ハ入むゞ六殊勝ハ亦難有ゞ〜毀心なり世尊是を覧し善哉比丘尼と賞ひ
御名を妙恵と号むゞ此時年来妃ハ奉公せし婇女五十余人も悉く剃髪し〜女僧と

なりぬ斯く耶瑜陀羅女得道の吏月景城ゞ生れゞ憍曇彌夫人怨ゞ亦殊勝ハ
思召ゞ夕陽山の林麓ハ庵室ゞ造営く進せらるゞ妙恵尼歓ハ不堪深く恩ゞ謝し
庵室ハ移住し〜菩提恵中と字ゞ額せし〜三摩耶行ハ入行ひ〜てゞ
御座る然ゞ女人の出家し〜佛弟子となる吏ハ妙恵尼より権輿ゞ是ゞ〜
阿難尊者の法情ハ所なしゞ末代ゞも女僧と成ん者ハ如来の御吏ハ〜ゞ吏なり

阿難尊者を供養し法恩を謝し〜ゞ〜

釋尊於忉利天謁二世母君

一時世尊緒羅漢ハ仰ゞ予往年檀特の難行終し時法の師阿羅々仙ゞ曰汝の信力
ハ依く実母ゞ耶夫人上天ハ生ゞ受忉利天王の后妃ハ具ゞ予其時ハ〜六通を得
ゞれゞ信ゞ〜今已ハ三明六通を得く三千世界を観通ゞ〜ハ阿羅々仙の言果
し〜く虚なゞ故ハ予忉利天ハ昇り帝釈天ハ説法せんと思し三加葉舎利弗目連
阿難伽難富樓那優婆離等ハ予ハ従く昇天ハ仰ゞ羅漢達大ハ歓喜し

其日遅くとぞ待れる。世尊八月一日より七日の間修法あらく満じる日天門に向ひ金剛
手菩薩摩訶薩と共に入定まします。
不生現神力不変真如妙覚円満今現在当来同示摩訶衍兼と唱へ阿逸多菩薩如意
を空く虚空を摩ひ給へば奇なる雲霧忽ち金色の雲と成り降り雲中に八葉の蓮
華座許多あり。五十二菩薩来降あり。如来師弟を引接し給ふ蓮華坐に結跏趺坐
天へ昇ひる。緘に如来の神通力不思議と申も疎なりけり。斯く世尊八緒羅漢と
共に忉利天に到ひ宮殿の内院を御覧あるに金剛妙色の雲中に三宇の殿あれ
り。東の殿八善現殿と額打ち西の殿八喜見城南の楼八学益胎得現とあり。釈
尊阿羅漢を顧ひ予が法を説ばれ八南殿なりと。女時傅立く在ます東殿の
玉扉を開れ飛行神力の天童数百人に囲繞せられ帝釈天出現ひ世尊を恭敬
礼拝し奉り曰。妙覚無為の如来。ちぐ来臨を辱ふ。夷天上の幸福何の幸うられ
過ぎんと拝謝ある。世尊も答礼して曰予此忉利天に来る夷三箇條の専用あり第
一に八五十六億七千萬歳賢劫三會の暁弥勒菩薩出現し未證の衆生を済度

有ばれ時の為前仏後仏の血脈を授けん為。二に八大集月蔵経を付属し
ん為。三に八喜見城に住しあ后妃の前身八予が乳味の大恩を蒙りたる
母ゆく在ば報恩の為説法しん為なりと仰ぐに帝釈天不審思ひ
如来の金言疑ひなるに八あらず。后妃の年八十八才なり。幼に所生の母と仰ぎ
る八如何なる證迹のいやと問へ世尊曰。后妃の因位の昔ガ伽陀國の王浄飯王
の宮妃に備り給へ摩耶夫人に予が出生後七日の後逝去し給ひ愛執の間に迷ひ
給へ予其苦患を救ん為毀心修行し難行苦行の功力に依て無明の闇
を出ず畏に生を受君の后妃に備り給へり猶も疑ひ給ば兼て二世の對面あん
時の證迹に予胎内に在し時乳汁を残し封じたり今喜見城の帳内に乳房と
絞り給へ乳汁迸りく予の口内に通じいんと示し給へ帝釈天奇異の思ひなし給
ひ天童に仰へ后妃の御許へ如来の金言を傳へ后妃に仕へ給へ夷に思召ふ
如来の金言といひ帝釈天の勅なれば已夷を得ば九重の翠簾の内三重の錦

帳を隔て素雪の御胸を開き乳房を絞りまゐ乳汁糸を曳く如く錦帳を
超翠簾を漏て世尊の口内に通ぶるぞ不測なる。帝釈天も阿羅漢も此奇特
を見て あつと感じ思ひぞ首を低て偈仰ある。后妃ハ歓喜に勝まゐぞ。喜見殿を
立出て世尊を礼拝まゐ。二世の對面なるまゐぞ。世尊も后妃を拝まゐ其後学
益胎に入給ふ。帝釈天の前佛後佛の血脈を月蔵経を授与まゐ。次に后妃の為
に般若を説まゐ。是に依て后妃宿命を識善根純熟まゐ。永く生老病死苦を離れ
まゐ。其御歓び余り。后妃摘の花を手折て如来に捧まゐ願ハ一佛浄土の引接を違まゐ
夷かれと固く結縁て拝まゐ。摩訶曼陀羅華是なり。今も佛前に花を献る人
ハ懺悔懺悔万徳円満大阿曼陀羅華と此文を唱て捧ぐるなり。ぞ緒天緒菩薩
納受あり。一佛浄土に生んと疑なし

提婆達多厄世尊附平都波功徳

世尊已に慈母と二世の向顔なまゐ。統法残る所なく終りまゐ。今ハ下界へ下らんと
帝釈天后妃に別を告まゐ。苗も果ぞ花にあぐれハ帝釈天々将
に命じて如来還幸の路に三の宝階を造らる。中央ハ閻浮檀金。左ハ瑠璃。右ハ瑪瑙
其雕鏤細密に人工の及ぶ所にあらぞ。世尊師弟是を踏て下まゐ梵天蓋を挑り四
天王左右を守護。二十九菩薩前後を囲繞て花を散し技樂を奏し。其他無数
の諸神諸菩薩恭敬礼拝て送りまゐ。実に尊卑御夷なり。ぞ。不測の魔
障あり。世尊の叔父解飯王御子提婆達多ハ往年小弓始の勝負相撲の勝劣なんど
に敗せ。より深く遺恨を含。如何ても仇を復んものと思ふに悉達太子宮中を潜び出
行方をぞ成まゐ。女時其頭怒を忘るに学道成就て再び世に出まゐ。より萬人
其法徳を仰ぎ尊信せざる者なれぞ。提婆達多亦嗔恚の炎胸に充世尊を害し佛
法を破滅せんと大悪念を発て。摩竭国の北冥山に住法性妖顕と云神通廣大なる鮫
魔神を役使する道士を師て。邪道を学び神変奇特の術を習ひ究め両をよび
風を招く夷ぞ得る。今如来の忉利天より降まゐを知是ぞ究竟の時節よりて。十六

ぶついまぐ
佛威覿軍と
懲を図

六師百種外道七道速疾鬼等を招集め波羅那國の鉄囲山の半腹に屯し世尊の還幸を妨げ害し奉んと謀る世尊早く是を知ひたまふる悪魔外道共も遂に佛果を得せんと却て大慈悲を生じ少も怕ず緒羅漢を引連て上人の下知に待従し天魔破旬百千の悪相を現し毒霧を降し黒雲を發して世尊師弟を千重万囲に取り竜利箭を射る支雨の如し世尊微笑し給ひ伽羅如意と揮ひ給へば数萬の箭さながら忽ち五彩の妙花と成毒霧は却て香風と成て肌を涼くし給へば魔軍此体を見て大に怒り鋼刀を揮長戟を回し斬近づく世尊亦如意と虚空を排ひ給へば数万の戟魔軍の手を離れ空中に編満して却て魔陣に向て降下る雨の如くなれば魔軍狼狽周障踵を反して逃んとすれば四天王十六善神其他無数の天将罪人面に充満て大怒の弓箭を張或は降魔の利剣を閃し喊を發て攻め奉れば進退究り手足を張て戦慄し掌を合て世尊を拜し大慈大悲本師本佛哀愍を垂給へと泣悲む世尊是を憐ひ給ひ微妙の御声を以て一切如是大悲師緒悪魔作衆善奉行共益横難と唱へ給へば刀戟魔軍の手に回り緒天弓箭を弛め魔軍深く慚愧し身を隠し形を消し逃失れば提婆達多も恥果唯一身となりて這々逃回り本國に閉籠り人に面を合し得ず深く身を耻るが悪念は猶弥増て如何にして世尊を害せんと日夜悪謀をぞ回らす世尊は魔軍を去ひ伽毘羅城に還幸あり夕陽山に向て行て魔軍耶山と号し清瀧殿を焚利て切利天正寺と号し初て父母報恩經を説給ひ憍曇彌夫人の為に菩薩摩訶般若經を説給ひ鳥将軍夫婦の為に發心報謝經を説給ひ其他月卿雲客の為に種々の妙經を説給ふが佛法に帰依する人益多く愈御弟子の數まさりぬ其後世尊猶も緒國の悪種を降度せんと緒羅漢を召具して伽陀國を立波羅那國をさして赴給ふ所に提婆達多國中の兵を募り郊野に埋伏し如来師弟を害せんと謀り給ふ三明六通の世尊早く是を知ひたまふ猶も休まず緒羅漢を従へ野徑を過り提婆達多と見たる一號炮を打て伏兵に指揮をなすこと二千萬の兵馬一多に發起

釈尊師弟を百重千重に取囲み箭雨射ること雨の如く刀剣の霜を降して攻
進む。然るに世尊及び緒羅漢の身より金色の光を放つ日輪に向う如く定に
入りて悪力に依て一人も傷者なく刀戟を揮者は金光に眼眩く近付得ざれ
ば進る者も世尊の慈顔に向て悪心忽ち善心となり我先にと刀剣を捨て
恭敬礼拝したるぞ。百千の囲陣自然解く安々と波羅那国へ赴むいたる。提婆
達多大に気狂焦燥自身三叉の鋼鎗を提げ金翅鳥の如く走て追蒐るに
前面の大地裂て猛火烈々と燈出焔提波女が身を焼人とせるぞ。大に驚て
道を久く追人とせれど前面の地俄然として大河となり波瀾を挙て深さ底
知れざるぞ。是に依て提婆牙を噛み憤るぞ。世尊我追ること能はざるぞ。手を空し
て本国へ引回るべし。斯て世尊師徒は提波女が難を避て波羅那国高盧山の
麓を過り更に高サ十丈の黄金の卒都婆立て。世尊停立て礼拝しむ

一見卒都婆永離三悪道何況造立者生安楽国と唱へ両眼に御泪を流し
大加葉尼すらく不審し。それ卒都婆は十地等覚の功徳ありと聞きしも如実無為
の如来偶仰礼拝し更に御落泪あるは如何なる御事ぞや。世尊曰加葉の
不審理なりなり。此卒都婆に就て統生たる物語あり。此波羅那国の都城
を波羅斯那城と号し今より三生前の王を慈明王と云い后妃を好香夫人と
せり。金色太子と云う皇子在せり。父慈明王因位の戒行拙く難病に悩伏せり。
臣下高綱して普く名医を召て療じたれども女も功験なく愈病苦を重ねり。宿
陀山の河宿部仙人慈明王の病を看て此病を平愈せんと欲せば生きたる人の生膽を取て与るなら
ば即時に
怒を発せず仁心深く人の意を破らざる人の生膽を取て与るなら
復を奏して群臣是を聞て曰その人と生て生涯憤怒を発せざる者有
ざやいかん善悪に就て人の意を破ざる者は猶有るべし世に知る薬を求
より父王を流出川の北岸に捨太子を位に即かるべしと綱定し。好香夫人遣使

弐世の恩ひく深く歎たまひ太子に子細を告く仰せ父大王悪病に卧ひ臣下の
徒流涙川へ捨まらんと議をたとく国乃捉かりくも事乃大王一人を捨まうふ忍人吾
も俱に流涙へ赴くべきなれど永く太子と別生ん事く雨々と注ぎ太子出生く
以来怒を憤らぎ人乃心を破ざる者の生膳を用ひく父王乃難病愈ぬ事なく
凡是を求くまる事乃何ぞ捨まるに及ひ紀と曰ひ夫人大に悦ひむひ歎く永く進
せむへく宮中へ回りぬ　金色太子近臣に密意を云合其夜自身胸を裂て生膳を
引出し臣下に示く死し臣下八洞を隠し太子乃生膳を煮へさあくね体ぬく大王
に献ぬ王歓ぐ即時に用ひ給ひ仙人乃幻果して違ぎ事乃難病一夜乃内に平
愈あく上一人より下萬民まぐ悦こと限なし並に後ぬく太子自己生膳を裂出て
覺去あく更露れ父王母夫人天に怒を地に歎き深く悔むへぬ其甲斐なくせ
く太子の菩提乃為に黄金乃卒都婆一千本鑄き世一千國に渡して供養あ
夫人ぬ同く黄金を以く観音大士乃像を一千躰鑄き世是ぬ千國に渡して太子の後

生善所を祈り此功に依て金色太子八子ぐ又浄飯王と生き四天下乃富を極え
むと乃ぬ又大王因位乃卒都婆を見て感涙をとどめ抑卒都婆八五智乃功
德あく五明神乃尊形なり加葉阿く曰何を乃五智とのひいや世尊日東八成
就作智ぬく下化衆生乃神力あり本地瑠璃光如来諸法通力乃德を具隨縁真
如乃形ぬく鬼神魔佛十界化現の利益あり南八明観作智ぬく出世々間の神力あり
本地光明王乃尊形色即是空々即真如乃相好無明乃闇を照し不変真如乃利
益あり西平等正智ぬく本地阿弥陀如来諸法引導乃功德を具有縁無縁乃
備なく摂取乃利益深く実相真如乃相形あり北大円鏡智ぬく本地法性如来十
界依正乃陣内を清浄堅固に具諸法成就乃功德有く無尋真如の相好あり中
央八法界他生智ぬく真明堅固功德成就の神あり本地阿因佛座禅思惟の姿
ぬく解脱真如乃相好なり以上を五智乃功德と謂り亦五明と所謂空風火水地
是なり天地を以て躰とし諸法を以く種とし諸縁を以く因とし諸行を以く果と

を多く乎都婆を一度々々時八十方乃陣内緒法乃道理緒佛乃依地緒願の功
德を所ゐ明なり東ハ水躰青色形円ゐ南ハ火躰赤色形三角西ハ金躰白色形半
月北ハ水躰黑色形圓ゐ中央ハ土躰黃色形方なり此如躰を緑〻〻法成就行
成就願成就神速成就なる弘佛とそ佛ゐ四種あり法佛化佛理佛直佛是〻
如是功德廣大ゆく他の教をなるひ即心即燈乃功力ある乎都波女なれバ緒佛出
世乃如法唯乎都婆ゐ竜ゆ乃故ゐ乎都波女を拜なるゐ一見乎都波女永離三
悪道何況造立者必生安樂國と唱へ給ふ賀葉以下の阿羅漢感涙ゐむ世実
難有ク乎都婆乃功德多〻〻冬恭敬礼拜〻世尊ゐ後ひ波羅那國へを赴き給ふ

提婆達多勸諫叛解飯王

解飯王乃太子提婆達多ハ這般も世尊乃威神力ゐ拉れ緤弁画餅と成れむ
大ゐ望を失ひ國へ逃回て心快〻〻樂まぬ只管佛法を妨ぐ兄緤弁を廻
し熟〻と思惟〻ゐ樹を拔さんと欲する時ハ其枝を苟今ハ其根を斷ゐ不如
我ゐ釈迦を亡滅さんと此理ゐ〻〻推れハ又解飯王ゐ緤叛を勸ゆ迦陀國を伐て浄
飯王を弑せ釈迦自多滅亡せ〻と亦這大悪心を生ず解飯王ゐ見く云る〻頃
日承れハ迦毘羅城乃浄飯王七星の政乃節臣下を集へ議せらるハ朕が子釈迦
無為正覚乃如来と成て天上天下乃至尊〻ゐ多居住乃國を〻朕が種族乃
中ゐ〻ゐ編奈羅國乃耳露飯王乃良摩國乃白露飯王伊波那國の解飯王是
乃種連枝〻と魚朕が為ゐハ弟〻乃臣〻ゐ〻年々の朝貢ハ又〻更なり時々参覲
〻〻慶賀を述ぶれゐ独解飯王のミ野心を懐ク〻〻参覲せ〻驕奢放逸ゐ耽り
〻民を雷罪なれを殊罰〻其子提婆達多亦悪逆無頼ゐして生靈を殺害〻
淫酒ゐ行を乱を〻是を捨置時ハ下民怒り怨ゐ遂ゐ逆乱乃緒を〻出して國家
自多他人乃為ゐ併呑せ〻ゐ〻〻不如朕四兵を發して其罪を問解飯王父子を誅
〻〻伊波那國ゐ取其を釈尊ゐ与へ奉ゐ法燈の料と せ〻國家長久子孫繁昌
乃基なら〻と仰出されゐ群臣是を卓論〻ゐ承伏して暗ゐ正伐乃准備

のいとす其ゆえあり是等閑なるね一大事なり構く御油斷まじき年古巧み緘しやう
おそ繞くるる素り子み迷ハ親ろなるひ解飯王ハ提婆達多を聰明睿智の者なり
と思ひ愛み溺し支なれど是を戒とし大みに教ふ淨飯王ハさしも聖主ゆく不仁
ろ成敗ハ露ほども非しれ何ゆ故ゆる暴悪の君となりむひんと拳を握く憤らる
提婆女又ゆ怒激ろ体をふく仕果なりと悦び又告て曰不来渠悉達太子天魔の為
み惑されて宮中ゆうれ出深山み入て外道を師し邪術を弄釈迦如来なんぞ自称
しく諸國を往歴し怪異法を説邪道を勧るみより愚盲ろ男女彼ゆ妖術み眼
を昧され年ゆ魅されく親を捨妻子を捨剃髪染衣ろ姿となる者枚挙ゆるれ
追あゆゆ已み其露飯王ろ子廣耶太子も渠ゆ徒弟となりく阿難と名呼白露飯
王ろ子難陀太子も釈迦ゆ惑されて僧となり伽難と称ち二國ろ皇子ゆる猶賀
れて増て況其余ろ者み於ても下人を主れ暇を乞ひて剃髪し子ハ親み告ず不及
染衣を著し皆釈迦ろ邪道み入ゆるを其主も其親も却て是を殊勝の事と心

得主ハ下人み希ゆ供へ親ハ子ゆ礼拝を敬み依く僧となる我勝ゆる事と思ひ惜も恩も
不顧釈迦の門み飯ゆる者幾千萬ろ限をしゆゆ愚男も日毎心修行を勧る者ハひ
しくゆも爭ろ大恩の父母を捨妻子を捨血脉を断子孫を絶と如ち悪道み入なゆと。
羞恥しゆく回しゆ紀是等ろ事釈迦の耳み入恨を含ず淨飯王へ諫せずみより此國を
攻亡さゆ紀結構も出来しみとと口出るまゆ散々と謗誘しゆれど解飯王瞋怒り悪
ゆ釈迦ろ行跡ろ原渠ゆ母ゆ耶ハ天魔ろ障碍ゆく妊娠し三年ゆ間孕く其陰産
ろ時も種々ろ怪異を現し右ろ腋下ゆ蹴破く出生せハ将み親を殺せる鬼子なり
釈ゆも淨飯王も大障ろ為み昏迷せれ其仇を忘く養育せり悉達ハ其重恩を
不顧擅み宮中を出憂愁をうる事十數年。適還り来ゆ姫し紀法を流布しく
愚俗を惑し忠孝の道を廢せむ是真み亡國ろ教みしく千歳み毒を流さと
羞ゆし好々我天下萬國ろ為親兄なる淨飯王を伐亡し釈迦師弟を屠殺と来
代邪法を信ずる者の絶みせんと飽まゆく提婆ゆ妄言み惑され父子謀を示し合せく

是より時々臣下を聚へて軍議し兵馬を調練するゆゑに心ある輩は大いに歎き辞を
渇く風練もれども斛飯王敢て練を不用国中ガ伽陀国攻伐の准備なし多く林
雨降續く更に晴る日なく諸所に洪水溢て官家民家悉く為に漂没し道路水深
丈夫に余り諸方往返船なくば通じる事能はず国人雨濕の為に患病を
を生じ家々戸々に悩臥するゆゑ斛飯王大いに憂ひ攻伐の事はまづ雨を止むる法を
需むるの外他事なし提婆も思果已が師法性妙顕を請じて霊雨の法を修せし
むと雖其験なく愈降つづく淋雨三ヶ月に及び百草根を断し大飢饉となりて国
中の困窮譬へ方なし是偏に釈尊を害せんとせし皇天の悪まる故なるべと智
臣に種々斛飯王を諫るゆゑに女し懺悔の心生じ伽陀国攻伐の念を止め自己罪
を天に訟へ誠心に祈られしに其赤心に感納有て徐く霊霧雨止れば国人
て白日に拜し再生する心地して悦こと限なし
世尊使難陀羅睺羅見三冥土

世尊は波羅耶国の統法終り夫より諸国を廻りて衆生を済度し給ふ
迦陀国伽毘羅城へ回り給ふ一千二百五十人の阿羅漢と俱に忉利天正寺に住し
九月十日より毀心三昧経を説き給ひ諸羅漢に如法行如律行如実行の三行
を附属あり翌年卯月八日より父母報恩経を説き給ふ浄飯王憍曇弥其外
新宮女官百司百官妃恵后に至るまで法座に参列して聴聞す。各踊喜乃
泪を催し涙を。諸統法終りて諸卿法座を退き商議するは如来這国に還
り給ふは海中の優曇華の開に等しく国中は勿論更なり近国遠境までも如
来を仰ぎ敬まれ万乗の宝位に即き給ふ天下信奉平安にして萬国従靡
国家の栄万代不易なるべし此旨帝に奏聞せんは如何と申すに是は誠に目
出度絶義なり是に勝る長久の良策はあらじ疾々其旨奏聞すべしと飛議
一致し諸卿袖を陳て参内し如来の御儀位を浄飯王
殊更に龍顔麗しく笑ひ給ふ朕も兼て此事を平日に願ひ奉来

ホ王位を譲るなり。生前の本懐死後の満足是ホ不過と思ども如来の深意
を量り奉り未只外せず。卿等已ホ朕が常願の如く衆議一致なる上ハ如
来ホ竭て譲位の議を告げへと詔命ある。諸卿大ホ悦び種々領掌し直ホ
切利天正寺へ参向して。世尊ホ拜謁し告るハ偖も君いまだ悉達太子と呼れ
ホ御時より聰明睿智ホ坐ホ大王たりし百司百官民間賤の末
に至るまで。太子宮位ホ就ホ摩訶王の威徳隆ホして。四天下臣伏し。萬民太平の
楽を極め。天晴早く成長なるホ祈なりホ不意宮中を潛出し愛心修
行なさせホ上一人より下萬民まで怨歎の間ホ迷ひ日月の光を失ひし心地し
ホ。難行苦行の功を重ね無上正覚の如来と現じ。神通自在を得ホ還
幸ホ王し夷海中の優曇花の開しよりも猶勝たる。一国の悦ホ此上萬人の願ひ
ホハ君摩訶王の宮位ホ即せホ萬機の政を執せホ。國富民栄ナ迦陀國八萬
代不易の繁昌ホ久しかるべし。御父大王平日ホ此義を願ホ如来の深意を

量り奉ホ臣等ホ詔命に御即位の儀を勧めしホ所ホ。ハ
ま御承引なしホ臣等が幸福何事ホ過ぬと冠を傾け跪
揃て申る。世の熟ら作る所ホ。卿等が衆議理なり。特ホハ又大
王の倫言とあれば。孝道とハ人望とハ背ぎ難。然ハあれども我
ハ一生の一大事ハ檀特雪山修行の間已ホ究り即位の事ホ。
ども予が想ふ一大願ホ有ていまだ其二を果さず。然ば大願満ずハ
左か右ホ方を定め。先緩々吏を譲ハ不倚不逆御辞ホ諸卿達ホ
按ホ相違なく強く勧めらる事ホ不能。願ハくハ大王の御孝道臣下へ
衰愍を垂れ御願満ホハ即位し給へと辞を遺し退散た
りし。世の人何と思ふ。月連を以て浄飯王へ奏せホハ若君難
陀太子并ホ羅睺羅が為ホ統ぎ法の位ホ渡せホ母公摩訶波弥夫
人其余好客芙蓉南夫人新宮女官ホ聴ホ。詔命なりホ告さ

世尊是に依て淨飯王ならびに三臺の后宮新宮女官難陀太子を先に立て
天正寺へ詣ぬ。妙恵比丘尼も羅睺羅を携ひ妻の比丘尼を招て
く法座に著ぬ。世尊八千五百人の阿羅漢を集へ自己獅子の高座
に上り統ぶらく。それ人々心有て智なれを鈍根の者といひ。智有て
心なれを利根の者と云心も有智も有を有善人と云心もなく智
もなれを愚人と号く。此他に三重病人と云。三世諸佛の悲願に漏ぎに
悲願に可ぎを大悲大慈に捨られもせざを救ぎもせざる者あり是を
漏さぎを結縁とする故五重の品傳と云。五法界教の相傳と号を故に太
子及び吾が兒の心我用れ智を闡く為なれを事有と云。難陀太子
羅睺羅なる者の御手を取て紵蓮如意を以て虚空を三度麾れぬへ
む。二人の太子獅子座を離を虚空に昇り形も見えざりぬ衆人大
いに驚れ何と弁る事なく世尊其間十大御弟子と倶に淨雲を招下し

是に駕して虚空に昇ぬ。難陀羅睺羅の二太子に指示しぬらく。即今三妙
土の景勢を見を見て心に紀く失念なる事勿れ。東に向く指揮むへ
む。忽ち紫雲中に金殿玉搆高く出現七宝荘厳端的に微妙の音楽皆
え香風薫じ来て諸天人快楽なるさまを心清れ光景なり難陀太
子如来に對ひ是は何と申所にやと問ぬ。世尊曰是を畏心妙智土と号く。仁
政を布民を恤く三宝に皈依なる者彼所に生を受諸般の快楽を結ぬ
と教示しぬ。亦北に向く指揮むへ。忽ち紫雲ひけ霹靂の如れ音天地に震動
し十八地獄出現を一地獄ごとに八の小地獄あり。其數都て一百二十八地獄
牛頭馬頭の阿房羅刹億萬の罪人を呵責なる形勢悉く見えたり。或
は紅蓮大紅蓮の氷に閉れ或を焦熱大焦熱の焔に咽び百態千般の責と
受る罪人の苦患刹那の間も止間なれを二太子是を見ぬ顔色を失い
戦栗しく如来の袖に執著偖も怕の形勢是を何と云所にやと問ぬ

如来三昧土と
云へり
図

其二
本店

世尊曰。是を方便化身と号け。悪政を絶し民を虐げ。或人を殺害し生類を屠殺し悪業を重し者罪の軽重に依て後に彼所に墜落す。怕ても怖ずし教示し給へ。羅睺羅尊者問奉く。汝罪人の中に彼猛火の穴に陥り堂んとすれど不脇叫喚すれと声出さ。苦げに呻吟する。如何なる罪を造りし人ぞと問奉る。世尊曰。渠は儀伯仙無見仙と云へる二人の道師なり。予いまだ母乃胎内に在し時。馬将軍と云へる者の託に憑て。出産の道を閉塞し罪に依て。俄に地獄に墜斯の如く呵責を受ること三十余年へ今救ひ得ざるべし。如意を按じ祈念し給へ。無見儀伯の霊魂徐に大空を追出地獄を離て漸に近着。大慈大悲南无本師釈迦牟尼如来と唱へ合掌礼拝し撥消如くに失ぬる。二太子益如来の方便力を敬ひ奉る。世尊に向て指揮給へ。忽ち雲間に極楽浄土出現し七宝の堂塔も巍々として光明十方を照し。化仏報仏金光明の臺より臺へ通ひ来る。

好意祠に及ばれば。二太子信心肝に銘じ。是は如何なる霊所ぞや。と問奉る。世尊曰。是こそ法性法身土なり。菩心修行の切を積一切衆生を済度する時は永く生老病死を離る。彼所へ往生する者は。茲に生前の行ひに因て。或は方便化身土の苦患を受或は菩心妙智土の快楽を受。此理を考て心智に貴れと教示し給へ。如意を繰て虚空を拂ひ給へ。即ち夢の覚る如く。二人の太子は一瞬の間に世尊の羅漢と倶師子の高座に降り給へ。思議とも疎なり。斯て世尊は富留那尊者に命て三冥土の形勢を遂一に説せ給ひ其后自己大慈報謝経を説給ひ五位七性五常七援等精く説法し給ひ而て仰せは惣じて人の子と生る者に四種の品あり。一に曰有本願の子。是因位の菩薩戒躰を遏し。其生る子三宝に結縁し三真如の道廣く上求菩提の功徳を重ね。又母を孝に奉る無上の位に至るを謂り。第二に曰。敬来の子両親に孝あり。六親に礼深く。外に八五常を乱さず内に三宝を敬ひ供養を謂

り弟三ハ曰来懦乃子。因位乃戒行を違りく犯法邪命なる也ハ生れ出さく悪
病ハ悩を二親ハ歎をけ。自茲と貧窮乃身となり。短命なるを縮り。弟四ハ曰
盗刼乃子因位の悪報ハ依く生れ出さく我慢心強く両親師友乃命ハ従ハず
善を悪を悪を好を。終ハ刑戮ハ身を亡ひ骨肉葬るハ地なれを縮り。弟難陀
太子を見るハ正く敬来乃子れぞ。此國乃譲を受十善乃位ハ即ち國家
昌平ハく萬民安穏くなる也。緒卿よく〳〵此意を悟り他の人ハ譲位乃法汰
有るべくもと示しまひ其日乃説法畢れぬ。浄飯王宮黨の裡より出御あり
実難有如来乃説法ハく。胸中乃雲霧霧晴れり。今ハ王位を難陀太子ハ
を譲るべしと勅しまひ。難陀太子ハ三冥土の景勢を眼前ハ見ゝそろ怕しく毅
心せまわく思召るハ浄飯王譲位乃勅命有れぬ心ハ狂豫を生じ。是ハ吾
をなしまひ。世を早く其意を知く曰るハ御身三冥土を眼下ハ見く毅心
修行を欲しまひと奇特なれども。乃る物ハ就て意乃動を見我の逆ひと号て

誠乃心ハあるぞ。只出家乃望を止り帝位ハ即く仁政を布むく自然孝道を
く其功力即ち三宝乃結縁となり正覚を得る期有るべしと練むハより難
陀太子佛智乃端的なるを感じ遂ハ承伏しまひ是ハ依て浄飯王ハ諸
卿も大ハ悦び如来を礼拝し。其日ハ法座を退出しまひぬ

世尊昇殿賜勅衣

浄飯王ハ世尊乃説法を聽聴あるく難陀太子ハ譲位有るべしを脅慮
定まりまひハ就て。世尊乃法徳を崇るまひ王宮ハ請じて供養せば
やとく忉利天正寺へ勅使を立まひ世尊ハ阿羅漢ハ昇殿あるべしと
を告さ世まひ世尊ハ慎び勅命を承りまひ十大弟子十六羅漢一千五百乃
比丘一千乃比丘尼を召具しく参内しまひ兼て浄飯王乃紹命をく上官を
宮殿ハ参列しく如来を待なり。中官之城外ハ迎接ハ出下官ハ天正
まより迦毘羅城ハ乃道路を洒掃し。不浄を拂ハ世まひ此事兼く隠れ

なれど國中の貴賤老若其形相を拜んと香を燒花を捧ぐ路の両
辺に群り手分の地をも残さぬ居なしびとり茲に解飯王の太子提婆達
多と疾見を安く先の懲ぜ世尊の行道を妨んと悪ク外道をうそひ
迦毘羅城に帰り國ども空中に四天王ども五十二の薩垂百千の天將如来
の行道を守護むと辺りに近著得ぬ偖世尊八千二百の四維漢を二
行に分ち先に進ませ千の比丘尼を二行に分ち後に續ませ世尊八十
大徒弟十六羅漢に囲繞せられて中央を歩むに迎接の官人も二隊に分れ
て前後を警固し管絃を奏して通行ぬ路上の貴賤も如来の形相を
拜ませり感涙を流さぬ者なし斯て世尊の師弟宮中に入ませば上官の面
々迎接して敬の玉座に結ばせり浄飯王は雞陀太子を従へて出御の上世
尊に御對顔ありて奈内の疲を労ひ給ふぞ如来も礼拜して帝恩を深
く謝し其時月景城の憍曇弥夫人より女官を以て奏問有るは如来

の昇殿を願ひ雞有御妻に法衣を献りて祖さむらふる。聲慮を伺
ひまりけと告ぜらるる帝宮に法衣を進ぜらるる妻なれども如来往年
檀特修行の時に羅穀の浄衣をぞ不浄の色衣と脱捨ぬと宣ばば如何
有ぬべと倫言ある世尊の安に宣旨さる妻に問ひ給ふ其時は毀心修行の初三
ヶ耶行の形なれど錦衣玉飾は憚りなり是は三宝供親の信心をこそ
功徳の法衣なれば慎で頂戴いたぬなりと曰帝理と思召其旨女官へ
仰せられるるぞ立面く憍曇弥夫人に斯と言上る夫人歓喜斜なるぞ金
色の錦の法衣蜀江の錦の袈裟紬繻蘭蓉の卧具等を女官に賜ぶ
如来に献りぬ是を布施の初とぞ波梨含那城の好客夫人吒那瑞城の芙
蓉夫人其他鹿野瞿陀弥の二新宮及び宮中の女官吾も〳〵と三宝結縁の為
おのおの色々の法衣袈裟卧具を緒羅漢緒比丘緒比丘尼に献せり世尊
是を見給ひ徒弟に向て問給ふ法衣の修行の妻衣真行あり。真行衣あり。

真行衣ハあるべし。衣真行ハあるべし。因安不衣ノ問奈何。舍利弗答て曰。水月自然なり。雲無心ハして山ノ岫を出るが如し。世尊亦問ハく。施主ノ厚恩喜悅とれば。顛倒謝せざんば鬼畜ハひとし。迦葉答て曰。功德崑崙ノ如し。罪福無量なり如来亦問ハく。世間出世ノ道理を察する事奈何。目連答て曰。無手人無舌を叩く。無舌却て其科を絡る。空魂舍利と世る歡喜しむ。善哉々々。功位不可説なり。因縁不可思議なりと賞誉し給へ。今ノ世僧徒ハ國王より勅衣を受ル事是其權与なりとや。斯て世尊宮中ハ在て諸善勇行ノ功德附屬の説法をなし給ふ事七日ハ。王殿を辞し切利天正まへを面りむひる

離婆多因無失因獄中

茲ハ尸羅摩羅國ノ人ハ離婆多と云ふ者あり。天性頴悟總明ハ。仙法を学び神通を得しが。釈尊世ハ出むり諸國を周撗して一切衆生ノ為ハ諸の經論と説ハを聽ずして深く佛法ハ帰依し。仙道を捨て世るの徒弟となりて

或問如来離婆多ハ向て曰。你前生ハ人の綸言を信じ。無実ノ科を受て人を困ら悪因いまだ滅せず。故郷へ回て阿羅漢ノ行をなし。罪障を果て後ノ門ハ来れと教示し給ふ。離婆多佛命を領掌して尸羅大國へ回り廣脇山と云ふ深山ハ入て草廬を結び穀食を断菜を飡ひ水を飲で阿羅漢の行をなすこと一歳余ハ及べども其一心中ハ退屈を生じ。身を顧ルハ木蘭染ノ布衣垢付破れ。是ハ依て法衣を脱で綴補ひ。木連樹と云ふ木ノ枝を伐て是を煎出し。其煮汁を受て法服を染樹ノ枝ハ掛て日ハ乾て。乾て亦染て日ハ乾。數日如斯して稍戒行を怠リて。此廣脇山ノ林麓ハ牛羊群ぐ市有ルハ一日一頭ノ黄牛如何して鼻緒解て山上逃ハ逃登れば牛主心慌て。其所より追所と尋登ハ。一人の比丘僧茅萱折て庵ハ座ノ席て牛主端て来ノ者如何道人今這路へ一頭ノ黄牛奔来しなり。何ぞの方へ逃往ひし。知むく教へと向離婆多素リ牛ノ来る所ハ

只ちぞと呑牛主大いに紛り。這路なりで他に巡往るに路もあるざるに。そも何方へ往くと。四方を見廻すに遥の樹上に黄牛の皮と覓れる物を曝したり。怪しく於て一点の疑心を生じ。離婆多が盧の辺を見れば。一箇の音に血の如き汁を湛亦傍に鋼刀あり。其側に白き骨の如き物を紙多捨散せり。牛主是を見て益疑ひ。偖は這僧我が牛を殺し皮を剥ぎ樹上に曝し。且其肉を喰ふるぞあらしと。再三再四牛の行方を推問て止ず。離婆多其戒行の妨をなす甚大いに怒り。你匹夫先刻より我が不知と呑るに猶ちぐ〜咨く。大吏の戒行を妨るは何吏ぞと厲声叱れば。牛主其勢ひに怕ぢ口を箝で山を下り。數多の市人に向山中に我が牛を殺せし賊僧ありと告るに。市人何前後の思慮もなく。茲ぞ掘捉て国王に紹よと。衆人荷擔して奇に。山上へ弛上り。有無の論に及ぶ。離婆多を捉て縛りあげ。曳下て国王の廳へ舁出るに。国王離婆多を廳前に曳居せ。你僧徒の身として。何ぞ牛を盗て剰へ切害して其肉を狼るぞと糺問ある。離婆多。白貧道阿羅漢の戒行を修して他を顧の僅なし。茲ぞ敢て牛を殺して増し牛を殺し肉を喫如き破戒無慚の事なしいんや。曾て跡形なし。経言あり。願くは大王明に察し貧道が罪を免しむと陳謝すれども。国王敢て許さず。你已に牛の皮を剥ぎ樹上に晒し。血を絞り骨を捨る蹤迹あるに猶妄語を吐て陳ずるやと。獄吏に命じて百杖撲挙せ。厳く獄中に囚ぜり。離婆多是より無失科に依て牢獄に繫がる。吏七年。心中に如来の金言の違ざる歎感じ。身は桎梏にされて獄中に在ども。一心を廣腸山に通じ。阿羅漢の戒行を忘れず。或時国王牢獄の辺を通れるに。離婆多獄中にて歎じて曰。噫世に曾て我が因位の昔無実の科を以て人を困し罪業滅せずと曰しが。果して我量ず牛主が経言に遭法衣を染て樹に乾しを牛の皮と見れ木連樹の奠汁を牛血と。其煮滓を牛骨とせれ。獄中に繫がる吏已に七年拘束ず。衆障消滅の期至るやと。独言するを国王伺て哀憐を生じ

衣と深く離婆多
禍を嚙を図

前生の業おとろく
離婆多無実の
呵責なあ一図

偖ハ渠実ホ牛を殺せ者ホあるぞりくろ。遂ホ牢獄出ー拉捨を糾ー。法衣袈裟等を賜りれむ。離婆多大いホ悅び恩を謝ー。ア羅ア國を立其須世るハ鉢利奈國ホ在く法を統ひ。御跡を慕く其國へ到ア如来ホ拜謁を世る。離婆多を見ひ你已ホ過去ノ罪障滅ーたり。你ガ前生ハ鷗瞿國ノ大臣なりーゲ一人ノ愛妾有ーホ。或ハ倉卒ホ眩暈ノ疾を生じく絶死せーホ。入ノ女年弛著く抱れるく左右ノ生ホ聞ークノ。並る所へ大臣外より回り来く是を見女年と愛妾と奸通もと心得女年を縛て刑んとーるるホ刑人是女年ガ無実ノ罪を憐と晴ホ助命ま。ちぬ大臣是を怒て刑人を獄中ホ囚るる。七年其後大臣三宝ホ帰依ー。慈悲心を生じて刑人ノ科を宥ー。獄を出ーく放ちやりね。大臣ハ即ち你ガ前身。愛妾ハ黄牛ノ前身。女年ハ牛ノ王ノ前身刑人を尸毘羅ア國王ノ前身なりと。統ひーむへむ。離婆多深く慚愧ー益世るの天眼通を得るとき戒行怠ーまで遂ホ阿羅漢の果を得たり

難陀王即位并淨飯王崩御

且統御毘羅城ホハ淨飯王世るの金言ホ因く難陀太子ホ繼位あーんて博士ホ吉日良辰を擇せ。諸國ノ小王及び百司百官を朝廷ホ聚へ。繼位の儀式先規ノ如く厳重ホ備へ。七寶七流ノ笠を授与ー。芽出度即位の式ちと。れで小國ノ王ちも月卿雲客難陀王を拜賀ー。皆萬歳をぞ唱へる。是ホ依く淨飯王ハ仙洞ホ移り住せ玉ひ。心穏ホ風月を翫び玉ひくるホ。樂き極つく怨み生ずるなりー。一朝依深ノ御不例ホ即玉ひくるが。御悩日ホ増く重ーせ玉ひれむ。憍曇彌好容美容ノ三夫人を更なり。満朝ノ諸臣大いホ驚れ普く四天下ホ名醫を需ノ召寄く。治療ホ肺肝を砕せれども。露だりのホ驗をも奏せざれば三夫人難陀王ノ御歎一さなりぞ。昼夜病床ホ侍病ー。衣帯代解ぎ寝食を忘くもくあつれ。群臣ハ日々ホ頼き女れ御容體を見まるく心を痛ち。法皇ノ令弟なる耳露飯王白露飯王斛飯王等の糾へ

使節を弛御悩乃報を報ずるかぞ其露飯白露飯乃両王を浄飯王の
御悩と共に大の不豫を取物もとりあへず伽毘羅城へ弛参らる只斛飯王乃こハ
提婆達多が絶言に依て奈良乃帝も其露白露乃両王伽毘羅城に
弛着迄に仙洞乃王殿へ伺候しむひれば浄飯王女官に扶起されて病牀に整
座むひ両王に対て宣く朕又大王乃宣旨を嗣ぐより心を以て仁義を行い
臣下に忠直なれば國に逆敵なく天下安寧にして今日まで枕を泰山の安に
置已に萬乗乃重位を嗣子に譲り雞陀王まで聰明睿智なれば治世朕が在位
よりも猶勝り今登霞とも更に世に遺念なしとも只憾らくハ朕が子釈迦
及び孫羅睺羅耶輸陀羅阿難可難陀を未期に見ざるのみ一乃遺念なり其も今ハ何國
に在て法を説むやせて國乃名を問ふまでと泪と俱に紹命ある白露
飯王曰世尊ハ今王舎城耆闍崛山中に在て説法しむよし承る這國より路を
隔る実一千五百余里大王乃御悩且夕に逼りいに勅使を弛むとも往返數十日

を経て恐らくハ御終焉に遭ひ実難久無く如来乃説法にも命終に臨で心
顛倒し心錯乱する八佛果乃妨なりと説むに願くハ世尊の師徒乃実を念とし
など王躰穏に弥陀如来乃引接を念じむへと練めむへ浄飯王龍顔に涙を
洒ぎむひ朕邂逅得がたき無上至尊の法王如来を子として過去乃福縁薄
く命終乃期に臨て其法顔を見其妙経を聴実を得ざる実よとく猶依々
悲々として偈望乃念弥増に増に不大聖世尊ハ王舎城乃霊鷲山巣窟に
在て説法を居むひるが天眼通を以て浄飯王乃重病并び渇望の念を
知覚しむひ阿難に難陀羅睺羅等に向て曰爰大王御悩且夕に迫り臨終に予及
你們に對面せん実を望むへども這王舎城と迦陀國と八路を隔て二千有五
百里勅使を立むるも其往返乃間に命終しむる実を憂ひむて三度大
願を発して一切衆生有縁を度し無縁を勧めて一人をも漏さじと誓に養
育高恩乃父王の渇望を知ずして未期乃願を満しめずして涅槃に

羅漢ハ這山ヲ留め富留那ハ弓ヲ換て說法し三加葉ハ魔障を防ぐと今し即因
阿難伽羅羅睺羅月連舍利弗以下の阿羅漢を後へ世尊ハ河薩如意とム
く虛空を摩ひへて忽ち五色の淨雲降り西天中ヲ自然如來師弟の蓮花座
有りてヲ世尊頭く羅漢と俱ヲ蓮花上ヲ坐し玉ヲ唯見大光明輝を一瞬の
間ヲ飛行く伽毘羅城ヲ著玉ふ城中の人民俄ヲ光明の輝を見て何事ヲやと猶
空中を仰ぎ見れば釈伽牟尼世尊緒羅漢と俱ヲ雲ヲ駕して降臨なり玉ふ
ヲ衆人合掌礼拜し我佛如來御ハ又大王御悩重く今將ヲ山崩御ヲ臨むつり早
く龍顏ヲ見へむと云も果ハ皆地ヲ仆て泣悲ミ世尊國人を諭して曰汝
們緒人深く歎く吏なれ無常別離八人衆の常なり予疾又大王の終焉及
湯ヲ王ヲ知て面来りて頭く仙洞の殿中へ入玉ふ這河淨飯王ハ深宮の
玉牀ヲ病臥玉ひ疼痛胸下ヲ急迫て煩悶し吏ヲ人妻を弁へむ方なるヲ忽
ち金光玉體ヲ映ずと思ひ玉ふ病苦女く怠る如く覺むひ目を開きむへ心栴檀

乃如く香風御身を吹く愈胸を苦く世玉ふヲ左右の后宮ヲ向むひ朕
病苦の為ヲ身神悩乱し給ふヲ金光身ヲ映し香風身を吹とひく疼痛忘る
を覺ム見何の祥瑞なりやと問玉ふ后宮も女官も何事とも弁へねば黙
然と打歎き奏し侯し大王の聖願届ぬ
釈伽牟尼世尊緒羅漢と俱ヲ還幸なりむつると姜と雞陀王三后宮の御悦び
ハ方ぶく打浄飯王睿ヲあつく覺ぜ病牀ヲ起坐むひ見へ城の盛ヲ出ハ非
る疾を見へ緒せよと倫言ある西大臣奉の三人とをるるち早世尊緒重子
を後へ昇殿玉ひ玉躰ヲ向ひ礼拜し玉ひ法顏ヲ御涙を洒玉ふ橋曇弥好
容美世尊の三后宮盛野瞿陀妃の二新宮ちゞも満堂の女官雞陀王緒臣下ヲ
至るまゞ感涙袂涙ヲ各袖をぞ漫くる浄飯王も歓喜の涙せ九ふ玉ずず
稍あり宜く朕老病ヲ卧終焉且タヲ迫ると久くも王位八已ヲ太子ヲ譲りつ
緒臣忠勤を尽し四境昌平なれば心を労する所なし去ハあれども唯臨終ヲ如

来り偶を中ざるを本意なく思しふ今如来及び羅睺羅阿難伽難其余
の阿羅漢ふ相見ちる事を得て。生前の願を完うり。仰ぎ願ハ朕をも九品
蓮臺ふ引接しむへとて。合掌しつゝ礼拝しまつる。世る曰君仁澤を四天下ふ施し且
三宝ふ皈依し。清浄戒行をしむへむ。後世必ず天上ふ生を得無比の快楽を
受むくと何の疑ひなれ只虔慮静ふしつゝ一心ふ弥陀佛を祈念しまつて
金色の脣を伸て。御手を浄飯王の額の上ふ加へ撫まつと三度即ち

緒行無常　是生滅法　生滅々為　寂滅為楽

と四句の偈を唱まつ浄飯王這偈を聞まつりて。病苦悉く退き心神忽ち
快楽ふしつゝ心禅定ふ入り如く端坐合掌し南無佛々々々と三言唱へまつ三世
諸佛二十五の菩薩無虚空ふ来降しむひ。音楽を奏し五彩の花を降し将
ふ裂心妙智ふ引接の瑞態を現しまつ浄飯王音楽の音ふ聞る龍眼
を開き虚空を瞥見ありて。歓喜踊躍しむひ忽ち崩御
し。雞陀王すゝみ三后宮二新宮女官妹女月卿雲客號泣啼哭しふく
城中ふ響くむりて世る是を練り制しむひる體を収て七宝七重の棺
ふ納し。香を焼花を散して諸羅漢と倶ふ供養しまつる事一七日其后
玉棺を寶輦ふ納め羅睺羅維優婆梨阿難可難宝輦の四隅ふ侍ひ
舁輿の官人是を舁挙まつれば尊者の釋尊紫磨黄金の香炉を執
て宝輦の前ふ立まつ雞陀王甘露飯王白露飯王三后宮二新宮妹惠
比丘尼をすゝめ三大臣月卿雲客般の官吏すゝめ列を正しく供奉しまつる
國中の人民老若男女ハ伽毘羅城より忉利天正ますゝめの路上の左右ふ充
満し。さながら赤子の母を喪うが如く身を投伏泣叫ぶ声四境を動かしたり
ける。斯て宝輦天正寺ふ着しまつれば夕陽山の樵蘇ふ香新を積ぎ玉棺を
置浄火をけく荼毘しまつる。雞陀王及び甘露白露両王三后宮百司百
官すゝぐ火の漸々ふ熾ふ燃る程の人々声を並て啼泣あり。世る人々

を練て曰盛衰不定の世のなりゆき。王者とゆゑも久しく現世に住し難き能
はざと一度無常の刀風に遭呼吸の息断絶して八尚魏きたる形骸も忽ちに
枯木の如し人々今此火の熾なる我々殘れ惑もとも六慾の劫火八是と
りも猶熾ふく身を焦さと吏甚し。故に萬吏を抛て佛道に入永く生死
の苦界を離るゝと説諭し玉ひ程なく荼毘畢れば泣々聖骨を拾ひ
黄金の函に収め夕陽山なる。尸耶夫人の墳とかゝぶ埋葬し其上に
十三層の寶塔を建釋尊緒羅漢と倶に塔廟を供養し玉ふ。
正覚真正の如来自己供養し玉ふ吏なれば三世の諸佛薩埵も来降し
妙花を降し音楽を奏して是を和し玉ふ此功力ゆゑ浄飯大王の霊
魂率天に生殘受五人吏疑なしと上下隨喜の涙をぞ流しける

釋迦如来御一代圖會卷四畢